

古代における複合辞「～として」の用法 — 基本文型を探る —

真仁田 栄治

0 はじめに

現代語の「～として」は資格・立場や名目を表す複合辞としての用法の他にも、「呆然として」「颯爽として」のように国文法での形容動詞の連用形と考えられるものや、「～[よ]うとして」のように「[よ]う」とともに用いて主体の意図や、出来事の起こる寸前を表すものや、「ケガの手当てはこれでいいとして、あとは救援がいつになるかだ。」のように仮定を表す接続助詞的なものなどがある。これらのうち、格助詞的な複合辞の用法としては鈴木(2006・2007)の考察、接続助詞的な仮定の用法の考察としては藤田(2000・2003)の考察が詳しい。

しかし上述の「～として」の多様な用法を全てを整理するためには、共時的な考察のみならず、史的な考察が欠かせない。そこで動詞的な意味を色濃く残している、未分化な「～として」の古代における使用実態を調査し、よく用いられる基本文型を探ってみた。

1 古代の文献に現れる「～として」

「～として」は上代においてはほとんど見いだせず、万葉集の題詞や左注を除いた、歌の中には以下の2例を見いだすのみである。

1. 妹として二人作りしわが山齋は(与妹爲而 二作之 吾山齋者) 452
2. 奥山の眞木の板戸をとどとしてわが開かむに(於久夜麻能 眞木乃伊多度乎 等杼登之弓和我比良可武尔) 3467

上の例は「あなたと二人で作った」という共同作業の相手を示す用法で、下の例は「ガタゴトと」という音象徴語の用法である。上代で「～として」の確例は少ない。漢文訓読で「為」字を使って「～として」と訓む例は多いが、これも当時の訓みかどうか不明である。その他には奈良時代の『続日本紀』の宣命や平安初期の訓点資料に早い時期の例が現れる。例えば、

3. このあひだにあまつくらゐにつぎますべきつぎてとしてひつぎのみ
こはへりつ（此乃間爾天都位爾嗣坐倍伎次止為弓皇太子侍豆）第七詔
『続日本紀』

大坪（1981）によれば、

トシテ・ニシテは奈良時代から用ゐられたが、トシテは『万葉集』にはなく、『続日本紀』の宣命にいくらか用ゐられてゐるのを見ると、古くから散文用語だったやうである。平安時代に入ると、和文では、トシテ・ニシテは衰へ、これに代つて、ニテが一般化する。

とあり、「～として」が書き言葉であつたと推測している。だが本稿では宣命や仏典のような特殊な、或いは専門家によって使われた日本語の用例ではなく、より一般的な日本語での使用実態をみることにした。

利用した資料¹は日本古典文学大系の『土佐日記』『蜻蛉日記』『枕草子』『和泉式部日記』『源氏物語』『紫式部日記』『栄花物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『更級日記』『狭衣物語』『大鏡』『今昔物語集』である）。なお、「～とし」や「～となして」などの例は採集していない。「～として」のみである。用例の出現数を表にしてあげれば以下のようなになる。

¹ 用例の採集にあたり、国文学研究資料館の岩波日本古典文学大系の本文テキストデータを利用させていただきました。

表 1

書名	用例数	%
土佐日記	1	0.2%
蜻蛉日記	4	0.7%
枕草子	2	0.4%
和泉式部日記	1	0.2%
源氏物語	27	4.8%
紫式部日記	3	0.5%
栄花物語	12	2.1%
夜の寝覚	6	1.1%
浜松中納言物語	4	0.7%
更級日記	1	0.2%
狭衣物語	6	1.1%
大鏡	4	0.7%
今昔物語集	497	87.5%
合計	568	100.0%

これをみると、和漢混交文である今昔物語集が圧倒的に多く、他の和文系の用例は全部合わせても1割強しかないことが分かる。この結果は大坪(1981)の「散文用語」という指摘と一致する。このように用例の偏りがあるので、本稿の分析は今昔物語集が中心となった。岩波日本古典文学大系の『今昔物語集』の冊別の用例数は以下の通りである。

1分冊(天竺部) 95

2分冊(震旦部) 106

3分冊(本朝仏法部) 170

4分冊(本朝仏法部・本朝世俗部) 95

5分冊(本朝世俗部) 31

これをみると、「～として」は仏典の説話に用例が多く、和文的な本朝世俗部

の用例は比較的少ない。同じ漢文訓読的な文体の説話の中で本朝仏法部に際だって用例が多いのは、記録体の影響が考えられる（峰岸 1959）。

2 「～として」の基本文型

「～として」の用いられる文を形式的に

「S が [Aを] Bとして P」

のように記述した場合、大きく分けて次のような基本文型を見いだすことができる。

I 〈自動詞用法〉：「Sは（が）Bとして」の形でSとBの関係が主述関係となるもの。

Aは現れず、Bは資格や立場を表す名詞で、述語はほとんどの場合、情態的な述語である。「自動詞用法」というのはPが必ず自動詞になるというわけではなく、「Aを」という補語をとらないことからの命名である。Pは、名詞や形容詞の場合はもちろん、動的な動詞を述語とする場合でも「～てあり」のように情態的な表現となりやすく、さらに「～としてあり。」のようにPに「あり」をとってBとP全体で形容詞のように使うことが多い。人物や場所の紹介をする場面で多く用いられる。

4. （この人（S）は）多武ノ峯ニ行テ、髻ヲ切テ法師ト成テ、増賀聖ノ弟子（B）トシテ勲ニ行ヒテ有ケル（P）ニ、『今昔』
5. 今昔、薬師寺ニ有シ舞人右兵衛ノ尉ノ玉手ノ公近（S）ハ、舞人（B）トシテ年来公ケニ仕テ（P）、若ヨリ弥陀ノ念佛ヲ唱ヘテ、魚鳥ヲ食フ事无シ。『今昔』
6. （この人（S）は）延昌僧正ノ弟子（B）トシテ、止事无ク成リ上テ（P）、僧正マデ成ニケリ。『今昔』
7. 御娘（S）ハ、醍醐ノ天皇ノ御后（B）トシテ、朱雀院・村上ノ二代ノ天皇ノ御母也（P）。『今昔』
8. 然レバ若ヨリ公ニ仕テ、博士（B）トシテ有ケル（P）間ニ、『今昔』

4の「行ヒテ有」、5の「仕」は習慣的な意味を表しており、動詞であるものの、情態的な意味を表している。6の「成り上ル」は無意志動詞だし、7の「御母也」は名詞である。8は「として」に「あり」を直接させたもので、指定の助動詞のように機能している。このように自動詞用法は情態的な述語をとることが多い。

意味的な観点から見ると、「～ので」「～のに」という因果関係、矛盾関係を見ようとすれば見られる例もあるが、このような例は稀で、「SはBであり、Pである」という二つの述語を結んだ単純な順接が一般的だった。以下に「～ので」「～のに」ととれる例を挙げる。

9. たかき家の子(B) として、官・かうぶり、心にかなひ(P)、世(の)中の榮えに驕りならひねれば(P) … 『源氏』
10. 我レ(S)、前世ニ此ノ男主ノ母(B) トシテ子ノ物ヲ恣ニ盜ミ用シタリシ(P)ニ依テ、今、牛ノ身ヲ受テ其ノ債ヲ償フ也。 『今昔』
11. 汝デ(S)何ノ故有テカ、羅漢ノ聖者(B) トシテ獄ニハ被禁レ給ヘル(P)ゾ 『今昔』

9は「～ので」の意味が、10・11は「～のに」の意味があるともとれる。しかしこのような例は稀で、まだはっきりと意識的に用いられたというより、単純な順接が偶然「～ので」「～のに」の意味にも受け取れると考える方が自然であろう。

Ⅱ〈他動詞用法〉「AをBとして」の形でAとBの関係が主述関係となるもの。

「他動詞用法」といっても、Pの述語が必ずしも他動詞になるわけではなく、「AをBとして」のようにAに伴ってヲ格が現れることを意味している。

この用例には「～を業として」(17例)、「～をはじめとして」(12例)、「～を師として」(26例)、「～を本として」(9例)、「～を使いとして」(12例)、「～を宗として」(6例)のような形式化した使用法が多い。

12. 婿の右近の大夫と言ふ者（A）、本（B）として、よろづの事を、掟て仰せられたるなゝり（P）。『源氏』
13. 高帽頼勢（A）をはじめ（B）として、御くるまのしりにおほくうちむれまいり（P） 『大鏡』
14. 國ニ某ト申ナル男（S）、年来、盜（A）ヲ以テ業（B）トシテ、近来、京ヨリ女ヲ迎テ（P）、 『今昔』

意味的には「～として」は「～にして」「～であって」「～と思って」「～とみなして」等となることが多い。

また、「～に使って」「～の機能で」といった道具的な意味で使われる以下のような例もある。

15. 仙人（S）、一猿（A）ヲ以テ使（B）トシテ菓ヲ僧ノ所ニ送ル（P）。『今昔』
16. 般若經（A）ヲ以テ翼（B）トシテ浄土ニ往生ス（P） 『今昔』
17. 菩薩（S）、草（A）ヲ受取テ座（B）トシテ、其ノ上ニ結跏趺坐シ給フ（P） 『今昔』
18. これ（A）を縁（B）として極樂浄土に往生して（P） 『栄花』

Ⅲ〈情態副詞的用法〉全体として情態副詞のように働く。

形容動詞の語尾と見なせるものである。和文系の作品にも多く用いられ、他にも「のどのどとして」「ゆらゆらとして」「ひらひらとして」「きらきらとして」「たをたをとして」等、数多く見いだせる。これらはやや古めかしい感じがするが現代語でも使われる。

19. 心地もほればれとして 『狭衣』
20. 世の物語しめじめとしておはするけはひ、 『紫式部』
21. 強ヨ強ヨトシテ、死ニ氣モ无カリケレバ、 『今昔』
22. 凜々として氷鋪けり 『枕』

IV 〈将然〉「～むとして」で節を受ける。

話者の意図や、出来事の起こる寸前の状態を表す。現代語では「～うとして」になっているが、機能的には現代語とほぼ同じである。

- 23. 致頼進テ維衡ヲ罰ムトシテ合戦スル間ニ、 『今昔』
- 24. 書寫セムトシテ、今日、僧共可来シ。 『今昔』
- 25. 伊勢ノ國ニ行幸有ラムトシテ、「速其ノ儲ヲ可營シ」ト被下ル。 『今昔』

V 〈全部否定〉二重否定の述語をとって全部否定を表す。

これらも現代語で書きことばとして用いられる。

- 26. 一事としてめでたからぬことぞなきや。 『枕』
- 27. 一事として、おろそかに輕め申し給ふべきに侍らねば、 『源氏』
- 28. 汝ガ云フ所ノ事共一トシテ不當ズ。 『今昔』
- 29. 飲食ノ味ヒ、殊ニ美ナル事无比シ。亦、飲食トシテ不具ザル物无シ。 『今昔』
- 30. 盛あるものは、必ず衰う。會ふものは、離別あり。果報として常なる事なし。 『栄花』

VI 〈逆述語〉

鈴木（1977）は森重文法の概念である「逆述語」を用いて「～として」文内の成分相互の句格を論じた。それによると、逆述語文は本来の述語Pを主語相当としてBが述語相当に機能するとする。つまりⅠ自動詞文やⅡ他動詞文ではSとB、あるいはAとBとの間に主述関係が認められたが、この逆述語文ではSが現れぬばかりか、想定さえもできない。つまり「消去」されているのである。

- 31. くにひとのこゝろのつね（B）として、「いまは。」とてみえざる（P）を、 『土佐』

32. 世のこと (B) として、つひの別れを、のがれぬわざなめれど (P)、
『源氏』
33. 其國ノ習 (B) トシテ人ニ女子有レドモ、父ガ財寶ヲ不傳ズ (P)、
『今昔』
34. 毎日ノ所作 (B) トシテ一百卷ヲ誦スル事不怠ズ (P)。

Bに來る名詞は「習い」「事」「常」「営み」などの実質的な概念が薄い名詞が多い。この用法は現代語でも用いられている。

このほかに「それはそれとして」「心は心として」のような慣用句や、欠字などの理由で文意不通ものを「その他」に入れて集計したものが以下の表である。

表 2

自動詞	207
他動詞	199
副詞的	49
将然	32
全部否定	35
逆述語	32
その他	14
合計	568

3 現代語との比較

現代語の「として」には格助詞的な用法と接続助詞的な用法が認められる。格助詞的な用法では、たとえば鈴木 (2006) が現代語の用例を以下のように分類している。

- (1) 私は留学生として日本に來た。(S「私」=B「留学生」) I 相当
- (2) 外国語を道具として使いこなす。(A「外国語」=B「道具」) II 相当

(3) 吉野の山は桜の名所として有名だ。(S「吉野の山」=B「桜の名所」

I相当

(4) 努力し続けることは人間として当然のことだ。

(5) 彼は仕事として雑誌に文章を書いている。(B「仕事」=P「文章を書く」) VI相当

(6) 政府として、早急に対策を考えたい。

(1)と(3)の違いは(3)は述語部分で価値・判断・評価を表す語(「有名・残念・当然・一流・人気がある」など)が来るというものである。

(4)はS(「努力し続けること」とB(「人間」)がイコールにならないもの。これらの用例の「として」は「資格・立場・名目」を設定したり、物事に対し、何らかの「価値付け・意味付け」を行ったりするという。

古代語で一般的な「として」の使い方は、二つの節を単純に結ぶ用法だった。つまり「SはBである」+「SはPである」という節のSを重ね、単純に接続して、「SはBとしてPである」のように結ぶIの用法と、「SはPである」と「AはBである」という節を結んで「SはAをBとしてPである」のように文を作るわけだが、その「Bとして」は現代語にすれば「Bで[あって]」に近く、述語的な用法を色濃く残していた。一方現代語の(1)~(6)の用例は形式化が進んでおり、Bは述語性から単なる文の補語の一つに進んできている。言い換えれば節から語へと機能が変化していると言える。それは「として」を「としまして」のように丁寧体に替えてみることで検査できる²⁾。(1)~(5)が「としまして」という形になるのはかなり特殊な場合のみで、丁寧な文体でも「として」の形で用いられるのが普通である。また(6)は「~としましては」の形でなら丁寧体で用いられる。しかし丁寧体の「~としましては」になるからといって、Bが述語的かということそうではなく、述語性を残しているというよりも主語に近づいているといえよう。つまり現代語の(1)~(6)は述語性をほとんど失っているのに対して古代語のI・IIの

²⁾ 鈴木(2006)では(3)は消極的に、(4)(5)は積極的に、(6)は「~としましては」という形なら積極的に、「~としまして」のような丁寧体の使用が可能であると述べている。しかし筆者には(5)(6)以外が丁寧体になるにはかなり制限があると思われる。

用法は述語性を多分に残しており、格助詞的というよりは接続助詞的な用法であると考えられる。

また、古代語の用法には現代語における (4) (6) の用法が見られなかった。(4) は「人間なんだから」あるいは「自分は人間という立場だから」のような因果関係を表し、(6) は「政府という立場では」あるいは「われわれ政府は」のような主題的な意味を表す。これらの用法が現代語の「として」が獲得した新しい用法であると言える。

4 まとめ

古代語の「～として」文の基本的な使われ方を探ってきて、6つの基本的な文型をあげたが、そのうちⅠ自動詞用法（「SはBとしてP」）とⅡ他動詞用法（「SはAをBとしてP」）が大半を占めた。Ⅰ自動詞用法では因果関係（「～ので」）や矛盾関係（「～のに」）を感じさせる例は少なく、現代語の「で[あって]」に相当するような意味で単純な順接、或いは並列的な関係で結ばれている場合が多かった。Ⅱ他動詞用法は形式的・固定的な言い方で用いられる場合が多く、それ以外には手段や道具を表す現代語の「で」のような使い方も多かった。このような形式的な用法が、本来述語であった「として」が文的な用法から語的な用法へと変化していく萌芽であったと考えられる。

一方現代語では「として」が「～ので」「～のに」のような因果関係・矛盾関係で結ばれることがあったが、それは以下のようなVの全部否定の例から発展したものではないかと思われる。

35. 然レバ、死ヌル事ハ人トシテ遂ニ不遁ヌ道也。『今昔』

35 は「どんな人も逃れられないことだ」という意味から、「人なんだから、逃れられない」のような因果関係として受け取ることも可能である。あるいは述語を否定から肯定に替えてみると、

「人として逃れられ <u>ない</u> 」	→	「人として逃れ <u>る</u> ことはあり得ない」
〈否定〉		〈肯定〉

後者の「として」は「人なのに逃れる（ことはあり得ない）」のように矛盾関係と受け取ることができる。このような過程を経て「～として」が「～のに」「～ので」の意味を獲得したのではないかと想像するが、その適否は後稿にまちたい。

以上、本稿では古代語の「として」Ⅰ・Ⅱの用法は本来単純に節を結んでいただけだったものがその述語性を失い、形式化することによって語的な成分として文に組み込まれていくということを確認した。Ⅲ～Ⅴの諸用法は、やや古めかしい言い方も含むが、現代でも使われている言い方であり、Ⅵ逆述語にいたっては、現代語とほとんど変わらない。

<参考文献>

- 森重敏（1959）『日本文法通論』風間書房
- 峰岸明（1959）「今昔物語集に於ける変体漢文の影響について」『国語学』36
「続紀歴朝詔詞解」『本居宣長全集 第七巻』筑摩書房（1971年）
- 鈴木泰（1977）「指定辞トシテ、ニシテの句格」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院
- 大坪併治（1981）『平安時代における訓点語の文法』風間書房
- 藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
- 藤田保幸（2003）「接続助詞的用法の「～トシテ」について―「複合辞」らしさの生まれるところ」『滋賀大國文』41
- 鈴木智美（2006）「複合助詞「として」の意味・用法再考―日本語研究と日本語教育研究からの包括的記述の試みの一事例として―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第32号
- 鈴木智美（2007）『複合助詞がこれでわかる』ひつじ書房

（龍谷大学国際文化学部専任講師）